

## 斎藤正二の牧口常三郎研究

伊藤 貴 雄

### はじめに

かつて筆者が大学院時代に斎藤正二のゼミナールに参加していたときのことである。彼が牧口常三郎を論じつつこう語ったのを思い出す。「アランが述べているが、研究するにはその対象に魅せられていなければならない」。斎藤がアランのどの著作から引用したのか、いま正確な典拠を示すことができないのが残念であるが、おそらくは、斎藤が訳したアランの『芸術に関する101章』の一節であったと思われる。

思想史研究における斎藤の業績は、彼の晩年に発刊された『斎藤正二著作選集』(全7巻、八坂書房、2001-2006年)を見れば明らかであるし、とくに牧口研究を収めた第4巻、第7巻については以前書評したことがある<sup>(1)</sup>。また、斎藤の人となりについては、筆者よりも前に彼のゼミナールに参加していた牛田伸一氏が、『牧口常三郎の思想』の書評のなかで見事に活写しているのので、そちらをご参照頂きたいと思う<sup>(2)</sup>。言うまでもなく、斎藤の思想史研究は、このうえなく徹底した資料批判と、文字通り博引旁証の考察によってつとに知られている。しかし、あらかじめ強調しておきたいが、彼の研究姿勢の根底にあったのは、単に対象を冷静に客観的に捉えるという《学者の眼差し》だけではなかった。そこには同時に、まさに彼自身が対象に魅せられているという、言わば《芸術家の眼差し》があったことを忘れてはなるまい。そして、その斎藤を全生涯で最も長きに亘って魅了しつづけた対象こそ、ほかならぬ牧口常三郎であったという事実は、それ自体が一個の研究に値する思想史的事実であると言ってもよいであろう<sup>(3)</sup>。

以下、本稿では、斎藤が牧口研究にもたらした新発見の幾つかと、その意義について、最小限の確認をしておく。もとより、原稿用紙に換算して約8000枚分にもおよぶ彼の牧口研究の意義は、到底この小稿で論じ尽くせるものではない。しかし、2011年1月21日、牧口研究にとって最大の

(1) 拙稿「新刊紹介 斎藤正二著『斎藤正二著作選集第7巻 教育思想・教育史の研究』『創価教育研究』第3号、2004年、233-238頁。および「新刊紹介 斎藤正二著『斎藤正二著作選集第4巻 日本の自然観の研究IV—変容と終焉』『創価教育研究』第6号、2007年、91-97頁。

(2) 牛田伸一「新刊紹介 斎藤正二著『牧口常三郎の思想』『創価教育』第4号、2011年、339-345頁。

(3) 斎藤正二は1925年東京生まれ。彼自身の述懐によると、牧口研究を開始したのは1960年代前半とのことであるから(『牧口常三郎の思想』第三文明社、2010年、635頁、726頁)、2011年の逝去までの85年の生涯のうち、じつに約50年間牧口研究をつづけたことになる。

功労者であり、約50年に亘り牧口研究を牽引した斎藤が逝去してから、筆者は、彼の研究の概要を紹介して未来の研究に資することが、ささやかながらも彼に対する追悼としてふさわしいのではないかと考えてきた。ここでは、斎藤の牧口研究を（1）注釈的研究、（2）評伝的研究、（3）思想史的研究の3つに区分し、それぞれにおける代表的な業績を概観したい。また、末尾に斎藤の主要著作一覧（資料Ⅰ）と、牧口研究論文・論考一覧（資料Ⅱ）を付しておくので、あわせて参照して頂ければと思う。

（資料Ⅰを見れば分かるが、斎藤の仕事は、日本思想史や教育思想史のみならず、短歌批評——若き日の彼は『日本短歌』〔日本短歌社〕や『短歌』〔角川書店〕の編集長だった——から、海外文学の翻訳に至るまで多岐におよんでいる。彼の牧口研究の特徴を精確に捉えるには本来これらの業績をも含めて論じなければならないのだが、今回は断念することにした。）

## 1 注釈的研究

斎藤の膨大な牧口研究のなかでも、最大の遺産と呼ぶべきものは、第三文明社版『牧口常三郎全集』（全10巻、1981-1996年）の編集であろう。そこに収録されている牧口著作は、大半が斎藤個人の牧口初版本コレクションを底本にしている<sup>(4)</sup>。同全集は厳密な校訂と豊富な注釈によって堅固な学術的信頼を勝ち得ているが、斎藤のコレクションなくしては、そもそもこの全集事業自体が成立しなかったと言って過言ではない。

なかんずく第1巻・第2巻の『人生地理学』（上・下）また、第8巻・第9巻の『後期教育学論集』（Ⅰ・Ⅱ）の全4冊に斎藤が付した脚注・補注は、既発表のものだけでも原稿用紙3000枚分を超えており、後進の学徒にとって裨益するところ誠に大であった。中身は斎藤の思想家としての面目躍如たるものがあり、たとえばテキスト中の一行一行、一語一語について、牧口がそれらを書き記したときに一体何を念頭に置いていたかを推測するうえで、参照すべき同時代の文献がふんだんに盛り込まれている。『人生地理学』の場合で言えば、1903年当時の日本で当該術語をどの思想家がどのような意味で使用し、それが牧口の用語法とどのような相関関係にあるかということについて、緻密な考察を加えている。考察は、「自然」や「観察」や「生活」といった卑近な用語の概念分析はもとより、内村鑑三や志賀重昂、スペンサーやヘルバルトなどの引用参考文献との異同照合、さらには、明記されていないがおそらく牧口が参照したであろう文献の推測にまで及んでおり、読むだけで明治初期・中期の時代状況が目に浮かぶような思いになる。一個一個の術語をめぐる、膨大な資料に基づいて当時の日本における思想の座標軸を引き直し、一人一人の思想家がその座標空間でどの位置を占めていたかを確定しながら、いわば点と点を結ぶようにして時代状況を浮き彫りにしていく。その基礎作業のうえに、牧口が当該術語を用いた意図を可能な限り客観的に推定する——そういう研究である。

『人生地理学』の注釈について、斎藤自身は次のように述べている。

(4) 斎藤正二『牧口常三郎の思想』第三文明社、2010年、722-723頁。

本巻には、ごらんのとおり、夥多煩雜なる脚注および補注が付してある。これまた、見苦しきや有難迷惑を感じられる向きに対しては、御寛容を乞うほかない。ひとつのみ弁明させて頂くと、本全集編集の“憲法精神”を忠実に護ろうとするかぎり、校注者は、すこしでも原著者牧口常三郎先生の仰言りたかった思想的主題を復元して現代読書人に伝えたいとの素志と熱情とに駆り立てられる自分を抑制できなかったのである。世上、牧口地理学および牧口価値論は正当な理解（あくまで科学的観点から言っているのであるが）を受けているとはいいがたい。いやしくも、牧口地理学および牧口価値論がひとつひとつによって正当に理解されていたならば、げんに未だに、“地理決定論（環境決定論）”と紙一重の「風土」論哲学が現代読書人に感化を及ぼしているなどの社会文化現象は生じ得ないはずであるし、牧口個人の生い立ちが貧乏だったから「利・善・美」の哲学的価値体系を創案することに成功したといった式の理屈づけも罷りとおりはしなかったはずである。乱暴な手合になると、牧口常三郎を以てファナティック fanatic な宗教集団の火付け役を演じた人物だというふう勝手に解釈し（まさしく、誤解以外の何ものでもありはしないが）、『人生地理学』の原典ひとつ、『創価教育学体系』四巻の原典ひとつ眼を通した経験も持たずに、思い込みと偏見とに凝り固まった議論を吹っ掛けてくるという始末である。これらすべて、人間はいかに“理性的思考”を押し進めることがむずかしいか、という証拠を示していると言うべきであろう。本当の牧口常三郎は、じつは、そのむずかしいほうの“理性的思考”を生涯をつうじて押し進めていった稀有の人物だった。明治以来の日本の思想家のなかで、牧口ほど徹底的に“理性的思考”をとことん押し進めていった事例は、殆ど数えるしかない。せつかく西欧から“ものを考えるすべ”を学んだ明治知識人も、大抵は、途中から“理性的思考”を抛棄し、例の（ということは、八世紀以降の日本の知識人すべての思惟方法がそうであったという意味だが）奥の手である“エートス発想”や“習合主義”や“日本化”の思考パターンを持ち出してきて、さっさと政治体制への組み込まれ作業に精出したのだが、牧口は、それをやらなかった。最終的に天照大神信仰を拒否して獄死を強いられるまで、牧口が一步一步すすんだ道は、北海道尋常師範学校本科第一学年の生徒時代から身に着けた“理性的思考”を徹底化させたものであった。思想家としての第一著作である『人生地理学』は、その“理性的道”をひたすら邁進する青年牧口の内面を照らすともしびに他ならなかった。ともしびを自分で形成し、形成したともしびで自分を照らした。その形成過程そのものが『人生地理学』の行文となって結晶した。—この重要な一事を、校注者は明らかにしたかったのである<sup>(5)</sup>。

斎藤がこの注釈によって従来の牧口解釈を刷新した点は、大小合わせて少なくとも百箇所を超えられると思われるが、なかでもこの小稿で最小限確認しておきたい意義が3つある。

第1に、牧口思想の理論的源泉として、彼が北海道尋常師範学校で学んだ教科書の影響を明らかにしたことである。たとえば、『人生地理学』巻頭にある「心意発動の自然の順序」という言葉が、ジョホノット著・有賀長雄訳『如氏教育学』（原著1884年、邦訳1885年）に基づくものであることを、斎藤は詳細に跡づけている。さらには、牧口が後年『価値論』で提唱している有名な「利・善・美」の合理主義・幸福主義も、じつは『如氏教育学』の説くイギリス経験論的な功利主義や、ペスタロッチ流の児童中心主義に起源があることを論証している<sup>(6)</sup>。それまでは価値論を「日本独自の土着の思想」と見る向きもあったが<sup>(7)</sup>、これに対し斎藤は、むしろ世界の先進思想を

<sup>(5)</sup> 斎藤正二『人生地理学（上）』校訂・脚注おぼえ書き『牧口常三郎全集 第1巻』第三文明社、1983年、605-606頁。

<sup>(6)</sup> 『牧口常三郎全集 第1巻』第三文明社、1983年、337-342頁。

<sup>(7)</sup> 美坂房洋編『牧口常三郎』聖教新聞社、1972年、1頁、301頁。

受容し再構成したその仕方に牧口の獨創性を見るべきだと主張した。これらの注釈によって、創価教育学の形成過程が明瞭に浮かび上がることとなった。(このほか、スペンサーやヘルバルトの教育学書からの影響を逐一解明した点も特筆すべき功績であるが、それらに関しては本稿3「思想的的研究」の項で触れることにする。)

第2に、**牧口思想の歴史的意義**として、『人生地理学』を《環境可能論》の書として評価したことである。それまで同書は、自然環境が人間を規定するという《環境決定論》の書として見られる傾向があったが<sup>(8)</sup>、斎藤はこの説に真っ向から反対し、自然環境の影響は人間の社会的発達段階によって異なるというのが牧口の趣旨であると主張した。すなわち、同書第1章の「公平なる世界観と、正当なる立脚地点の自覚とが、吾人の生活に欠くべからざる」という主張や、第3章の「地と人とは如何に交渉するか」という論題が、徹頭徹尾“人間いかに生くべきか”との問題意識に貫かれていることを、志賀重昂『日本風景論』をはじめ同時代地理学書との比較によって論証している<sup>(9)</sup>。斎藤の結論はこうである。「人間が未開の段階を脱して『開明人』の段階に達すれば、同じ寒冷や乾燥や降雨や湿気などの自然が、こんどは全く以前とは異なる働きかけを以て人間に関わってくるようになる。このようにして、人間が知的にも情緒的にも社会的にもどんどん進歩＝発達を深めてゆくならば、そのぶんだけ、自然のほうも深い“関わりかた”を見せるようになる。だから、人間は努力して個人的にも社会的にもつねに知識を磨き感情を高めてゆくようにしなければならぬ。——これが『地人交渉（自然環境と人間との関わりかた）』という地理学的思考の全体的主題である」<sup>(10)</sup>。この主題をこれほど明確に打ち出した思想家は、当時の日本では牧口以外にほとんどおらず、世界を見渡してもフランスのド・ラ・ブラーシュ以外ほとんどいなかったという事実を斎藤は強調している。

第3に、上記の2点とも関係するが、**牧口思想の政治的位置**として、自由民権思想や明治社会主義との関連を明らかにしたことである。周知の通り、『人生地理学』には志賀重昂の校閲文が付されており、そのため従来の研究では、志賀と牧口とを師弟関係で捉える傾向がしばしば見られた<sup>(11)</sup>。しかし斎藤は、牧口の本文と志賀の批評とをすべて比較対照し、二人の思想的立場には大きな懸隔があることを指摘した。そのうえで、牧口の用語法を見る限り、彼はむしろ志賀以外の人物から大きな影響を受けていること、とりわけスペンサーの翻訳者でもあった尾崎行雄からの影響が考えられることを推測している<sup>(12)</sup>。事実、この推測は、約20年後に創価大学創価教育研究センターの塩原将行氏が、牧口の友人だった斎藤弴花（一般には、むしろ国木田独歩の友人として知られている）の証言を発見して、裏づけられたのであった<sup>(13)</sup>。もう一つ、斎藤が推測

(8) 國松久彌『『人生地理学』概論』、第三文明社、1978年、65頁。

(9) 『牧口常三郎全集 第1巻』、351-363頁、372-379頁、407-417頁等。

(10) 『牧口常三郎全集 第1巻』、407-408頁。

(11) 美坂『牧口常三郎』、48-49頁、85-86頁。

(12) 『牧口常三郎全集 第1巻』、369-371頁、403-407頁等。

(13) 塩原将行「上京後の牧口常三郎と『人生地理学』出版に至る経過」『創大教育研究』第11号、創価大学教

した密接な影響因子が幸徳秋水である。すなわち、牧口の用語法には、幸徳秋水の『廿世紀之怪物 帝国主義』(1901年)の用語法との対応関係が見られることを指摘し、幸徳の帝国主義批判に対する共感があったのではないかと推測している<sup>(14)</sup>。この推測もやはり、約20年後に塩原氏の調査により、牧口が『人生地理学』発刊後に社会主義者たちとともに言論活動していた資料が多数発見されることで蓋然性が高まった<sup>(15)</sup>。なかでも特筆すべきは、牧口が主幹を務めた『日本の少女』(1907年)という雑誌の表紙絵を23歳の竹久夢二が描いていることである<sup>(16)</sup>。当時夢二は幸徳の平民社に共鳴し活動していた(1910年の大逆事件では検挙されもした)。牧口と幸徳との間には、間接的にせよ何らかの接点があったことは十分考えられるのである。

このように、斎藤は牧口テキストに登場する術語一つ一つの用語法を、同時代の思想家たちのそれと比較対照する概念史的研究手法を駆使することで、表面には現れていない思想的影響関係を眼光紙背に徹して析出するという、推理小説の謎解きのようにスリリングな読解を行い、我々の眼前に思想家・牧口常三郎の新たな相貌をくっきりと浮かび上がらせて見せた。斎藤の注釈的研究が持つ最大の魅力であり、かつ学問的意義と言ってよいであろう。

しかしながら、『人生地理学』の注釈作業は、斎藤の健康状態に起因する制約もあり、残念ながら第二編と第三編の補注の一部が未完で残されることとなった。その間の苦闘については、斎藤自身が『人生地理学(下)』編纂・校訂・注釈おぼえ書き」のなかでこう綴っている。

むしろ、本第二巻『人生地理学(下)』に関して是非とも付言しておかなければならぬ必要事項は、次の二点である。(一)脚注は、結論(第四編に当たる)／第三十四章地理学の予期し得べき効果、に至るまでの、全チャプターを残らず取り扱ってあること。(二)補注は、校注者の健康状態および知的準備状況に制約されて、第二編地人相関の媒介としての自然／第十九章気候、の中途までしか取り扱えなかったこと。せめて第二巻『人生地理学(下)』には、第二編／第二十二章人類、までの六つの「章」の補注を収載したかったのだが、或る一つの項目に二カ月も三カ月も費やして百枚近い原稿を書いたかとおもうと、その隣の童謡歌詞の穿鑿に半歳も費やして作者・出典の手懸かりさえ掴むことが出来ず、その結果、編集部の机上には第二編第三編各章の補注五〇〇ページ相当分量が積み上げられているにもかかわらず、番号順につながらない個処が箇欠けのごとく随処に生じ、已むを得ず斯くのごとき処置を採らざるを得なかった。

—減刑嘆願のようになるけれど、実際事例を陳べて申し開きせねばならない。前記第十九章気候の、第四節風と人生、という「節」まで補注原稿が進んだとき、此処彼処に難所＝難敵と遭遇するのはもとより覚悟の上であったが、上欄小見出しに「風力と工業」と詞われた段落(初版本、五〇一～二ページ／本全集本巻、五八ページ)に到って、「国土が海面より低下せるによりて絶えず海水の侵入の禍害を受け

---

育学会、2002年、47-62頁。および塩原将行「牧口常三郎著『人生地理学』41の書評」『創価教育研究』創価大学創価教育研究センター、2003年、264-265頁。後者には、斎藤弔花が『神戸新聞』(明治36年10月20日付)に寄せた『人生地理学』の著者に與ふ」という記事が翻刻されており、それによると、牧口は「氏〔尾崎行雄〕は天下の傑人也」と語って尾崎との面会を望んでいたと言う。

<sup>(14)</sup> 『牧口常三郎全集 第1巻』、346-350頁、

<sup>(15)</sup> 塩原将行「牧口常三郎『米國の人生地理』、『米國の地勢と人生』、『外國地理学(部分)』:資料解題」『創価教育研究』第6号、2007年、60-64頁。

<sup>(16)</sup> 塩原将行氏の御教示による。

つゝある<sup>(オランダ)</sup> 荷 蘭 国民の如きは、海岸に多くの風車を並列し、此力の後援に頼りて浸水を排出し、以て彼等の永久なる国敵を防禦しつゝあるなり。」という<sup>センテンス</sup> 文に出くわすと、当方は忽ち困惑に陥った。あり来りたる参考資料を弄り廻し、あり来りたる補注文章をでっち上げては、原著者の思想主題に対し不誠実を働くことになると、自戒を迫られた。風車の叙情的景観にばかり眼を奪われず、その動力源としての効用と文化史的意義を文章化すべきであると自戒した。“若き牧口”は、未来日本国こそまさに「開明国の先輩」オランダに見習って自力自営の富裕なる貿易立国を為すべきであるとの理想を高らかに掲げ、そのさい「知識こそ凡ゆる<sup>あら</sup> 障 碍<sup>しょうがい</sup>を克服する最大の力である」との教育理論の確立に努めていたから。そこで、平田寛『失われた動力文化』（一九七六年十一月、岩波新書版）から始めて、今井登志喜『近世における繁栄中心の移動』（一九五〇年二月、誠文堂新光社刊）に到るまで参考文献十数冊を渉猟読了せねばならなくなり、たった一項目完稿させるのに三月余を所要した。同じ<sup>セグメンツ</sup> 節の終り近く引用童謡「浜の好い風ゴート吹け」の典拠・作者の搜索では、努力がつかぬに実らず、あつというまに一年を空費してしまった<sup>(17)</sup>。

とはいえ、文中に「第二編第三編各章の補注五〇〇ページ相当分量」が出来ていたとあるように、多くの部分が書き溜められていたことは事実である。創価教育研究所は、御遺族の御了解のもと、原稿用紙換算で数百枚分におよぶ（遺稿）を紀要『創価教育』誌上で連載する予定である。

## 2 評伝的研究

斎藤が注釈的研究とほぼ並行して（一部それに少し先だつて）進めたのが《評伝的研究》であり、なかでも最も有名なのは『若き牧口常三郎（上）』（第三文明社、1981年）であろう。これは全部で700頁、原稿用紙換算で約1500枚分の大著であるが、新潟県荒浜で生まれ、その後北海道小樽に移った青少年期までの牧口を扱ったものである。また、その続編として、北海道尋常師範学校生徒時代の牧口を扱った原稿用紙約500枚分の論考が『斎藤正二著作選集 第7巻——教育史・教育思想の研究』（八坂書房、2004年）に収録されている。18歳までの初期牧口を描いた文献としては、質量ともに、今日までこれらに比肩するものは現れていない。それまでの牧口像をことごとく塗り替えた画期的業績であり、学問的精査に耐え得る本格的な牧口研究はまさに『若き牧口常三郎』（続編を含め）から始まったと言っても過言ではない。

同書の執筆意図については、斎藤が後書きでこう述べている。

序章においては、まず、どのように“若き牧口常三郎”の精神形成史を追跡＝再現したらよいか、いや、それより以前に、なぜ“若き牧口常三郎”の具体的“生”を復元する必要があるか、という探究上の出発点から洗い直すことにした。世上、籠り通っている考えかたとして、牧口常三郎の偉大なのは今日の隆盛なる創価学会の基礎をつくったという理由に拠る、とする評価がおこなわれている。いっとき評判になったアメリカの社会学者デール・M・ベセル著『価値創造者<sup>牧口常三郎</sup>の教育思想』という本をよむと、「牧口が独創的だといえる第一の根拠は、現在、池田と創価学会が大規模に牧口の提案を実行しているという事実にある」との結論を提示している。このような考えかたも全く誤りだとは言えないだろうが、正しくは、かりに今日みるごとき創価学会の諸活動が全然生起しなかったと仮定しても、しかも牧口常三

(17) 斎藤正二『『人生地理学（下）』編纂・校訂・注釈おぼえ書き』『牧口常三郎全集 第2巻』第三文明社、1996年、549—550頁。

郎の地理学理論および教育学思想の偉大性には毫も変わりはないのである。ベセルの場合は、教育的人類学者アンソニー・F・C・ウォーレスの「再活化運動」の理論をモデルとして借用し、自分に都合なように、飛び離れた場所にある幾つかの社会をくっつけて列べたり、かけ離れた時間を無視して諸事象の段階づけをおこなってみたり、ようするに形而上的ゲームを真顔でやっているに過ぎない。自然科学にしる社会科学にしる、そこで用いられる理論というものは、とことん突き詰めていけば形而上的ゲームと断じられても仕方ないのだから、それを非難しようとは思わない。ただ、牧口常三郎という具体的な現実存在は時間のなかでこそ生きたはずであり、主体と客体との絶えざる弁証法をおこないながら生きたはずであるし、一方、研究者であるわたしたちのがわもまた時間のなかで、“全体化の過程”を履みながら生きようとしているはずである、という存在の意味の解明から始めるのでなければ、理論も探求も学問もなにもない、とだけは確言したいと思う。どうしても、われわれは、時間的なものである“生”を問題にせざるを得ない。一回こっきりの牧口常三郎の“生”やその理論形成過程を捉えようとするに当たって、かれの死後の創価教育学会（および戦後の創価学会）の理論活動や実践活動を手がかりにしたのでは、順序がまるで逆である。われわれは、ベセルとは逆の方向に、これとは反対の試みを、カッコイイ分類づけや段階づけを避けながら、あくまで時間に沿って未来のかたへと向かいながら、泥臭い、ぶざまな、時によって行き滞りて途方に暮れる体の、しんどい探求をつづけるべきだと思う。

そこで、本書全体の探求作業を押し進めるにさいしては、“若き牧口常三郎”の人間形成および思想発展のプロセスを、孤立した個人の精神の運動とは見ずに、複雑で相互に関連する社会的諸側面との密接な関係において、その全体性を把握するように努めること、したがって、常に流動する物質的現実との関わりにおいて産みだされる“若き牧口常三郎”の思想形成過程の時期・位置・構造などを可能なかぎり正確に捉えること、どんな場合にも“若き牧口常三郎”という当面の研究対象はなまの人間であるとの感じかたを忘れないようにすること、その他、過剰なくらいの“方法上の留意事項”を守るように心掛けた。そうすることによって、“若き牧口常三郎”という個人像があまりにも鮮やかに日本近代民衆史の描きだす“青春像”（日本近代社会が抱える諸矛盾や諸悪を背負わされて喘ぎながらとぼとぼと歩みはするが、理性と正義と人類愛とを片時も忘れることなく明日の希望を抱きつづけた“青春像”）と合致するのを知らされた。そのかぎり、まさに、牧口常三郎は「時代の子」Kind der Zeit であったと言える（18）。

『若き牧口常三郎』（続編を含め）が従来の牧口解釈を刷新した点は、大小合わせて数十箇所にも上ると思われるが、ここでも紙幅の都合上、3点に絞って紹介しておきたい。

第1に、柏崎県荒浜村時代（0～14歳）の牧口に関して、当時の荒浜村の状況を精確に再構成しつつ、彼における「海洋的合理主義思想」の萌芽を指摘したことである。荒浜村は、従来の研究では、“荒れた浜”という文字通りの寒村として考えられてきたが<sup>(19)</sup>、斎藤は、同村の資料群を駆使することで、少なくとも1870年代までの荒浜村は西廻り廻船の寄港地として日本海沿岸でも有数の漁港であり、漁が困難な冬にも漁網の製造によってそれなりの経済的獲得をしていたことを指摘した<sup>(20)</sup>。現に、『人生地理学』では「荒涼たる砂浜に往々其の土地と何等の直接関係もなき特殊の産業が勃興し、中には著大なる名声を天下に博せるものある〔…〕、越後の荒浜に産し

(18) 斎藤正二『若き牧口常三郎（上）』第三文明社、1981年、691-693頁。

(19) 池田論『牧口常三郎』日本ソノ書房、1969年、21-28頁。熊谷一乗『牧口常三郎』第三文明社、1971年、19-23頁。美坂『牧口常三郎』、17-20頁。

(20) 斎藤『若き牧口常三郎（上）』、156-191頁。

て北海全道の漁業の需用に供する漁網の如きは其著しきものなり」<sup>(21)</sup>と述べて、荒浜村の漁網産業を例に庶民のたくましさを強調しているところを見ると、斎藤説のほうが牧口の趣旨にかなっていることは明白と言えよう。また斎藤は、明治初年代の荒浜村の初等教育も調査し、それが“教育勅語体制”確立以前の徹底した「自由主義・合理主義、個人主義」の発想に貫かれていたということ、換言すれば、文部省の主導で官製教育が徹底化されるより前の時期に牧口が初等教育を受けたということの重要性を指摘した<sup>(22)</sup>。以上の研究によって、荒浜村の従来のイメージは大きく書き換えられることとなった。(ちなみに、後年の『牧口常三郎の思想』では、さらに近代日本史から見た当時の荒浜村の政治的状况についても重要な指摘を行っているが、それに関しては本稿3「思想史的研究」の項で触れることにする。)

第2に、北海道小樽区時代(14~17歳)の牧口に関して、当時の小樽区状況を精確に再構成しつつ、彼における(縁故的=人間関係の発想とは異なる)「理性的=論理的発想」の萌芽を指摘したことである。従来の研究では、牧口が小樽警察署の給仕に雇われたことについて、警察署長森長保との出会いをもっぱら僥倖として描いてきたが<sup>(23)</sup>、これに対し斎藤は、当時の北海道における官僚の派閥抗争に目を向け、むしろ、牧口が警察内での出世の道を選ばなかったことの見識をこそ評価すべきであると主張した<sup>(24)</sup>。また、1880年代の小樽区が、(一)付近のアイヌ人たちが和人の生活空間拡大に圧倒されて奥地へと後退を余儀なくされた事実、(二)日本一の人口増加率に伴って自然景観や都市景観が年ごとに様変わりしていた事実、(三)牧口が移住する前に日本で三番目の鉄道(小樽-札幌間)が開通して電信網も完成していた事実、——以上3つの事実を有していたことに注目し、こう結論している。「“文明の利器”を、ただ単に、自分以外の誰か偉い人がつくりだしてそれを自分に与えて寄越す便利な機械だというふうにはけっして考えず、それと自分の人生との関係に立って、その持つ全体の意味を捉えようとする精神的姿勢——それこそが、真義における“地理学的思考”にはかならない——は、やはり、牧口が北海道で展開される一つの人生事実を精一杯生きたためにつくられた、と考えざるを得ない」<sup>(25)</sup>。——さらに斎藤は、もし警察署給仕になったことを僥倖と呼ぶならば、むしろ牧口が(通常の人々が目にし得ない)中央官庁の書類や、各種新聞・雑誌・百科全書等を閲読する機会に恵まれていた点を指して言うべきであるとし<sup>(26)</sup>、加えて、当時牧口が接し得たと考えられる《新聞ジャーナリズム》や《通信講義録》にまで探索の手をおよぼしている<sup>(27)</sup>。

第3に、北海道尋常師範学校生徒時代(17~21歳)の牧口について、当時の師範教育の状況を

(21) 『牧口常三郎全集 第1巻』、313頁。

(22) 斎藤『若き牧口常三郎(上)』、266-314頁。

(23) 池田『牧口常三郎』、30-31頁。熊谷『牧口常三郎』、29頁。美坂『牧口常三郎』、27-28頁。

(24) 斎藤『若き牧口常三郎(上)』、508-531頁。

(25) 斎藤『若き牧口常三郎(上)』、466頁。

(26) 斎藤『若き牧口常三郎(上)』、532-627頁。

(27) 斎藤『若き牧口常三郎(上)』、628-688頁。



再構成しつつ、彼における「反権力的思考」「平和主義」の萌芽を指摘したことである。最初に齋藤は、牧口の入学に関する定説を修正している。従来は、“難関の入試を突破した”ものと見られていたが<sup>(28)</sup>、齋藤は、「事実としては、若き牧口の師範学校入学は“推薦入学制度”に拠るものであり、敢ていえば“無試験”で入学を許可されたのである。しかし、こう言ったからといって、牧口少年の学力が足りなかったとか、籤運に恵まれたとか、そんな帰結にはけっしてならない。事實は、またしても逆である。当時、師範学校入学の推薦を受けるということは本人に余程の学力がなければ不可能だった<sup>(29)</sup>と反論した。そして、牧口の優秀さはむしろ、「己れひとり敢て意識的に学校当局の押し付ける兵式訓練や密告奨励慣行や教育勅語崇拜を受け入れる代わりに徹底的な開明思想の理解および受肉化に赴向していった、という精神形式過程の鮮烈さないし正し<sup>さ</sup>」<sup>(30)</sup>にあると主張している。また、その《開明思想》の証左として、彼が師範学校教諭時代から書き溜めた『人生地理学』において日本の“島国根性”を批判し、反軍隊主義＝反帝国主義を掲げた点を挙げている<sup>(31)</sup>。さらに、『人生地理学』全編にわたり「開明」という言葉が頻出するのに対して、「開拓」という言葉はわずか4箇所しか見られないという事実を指摘し、この頻度の差に、権力主導の「開拓」の不公平や非人道に対する牧口の批判精神を読み取ってもいる。『開明』enlightenment; educationと『開拓』reclamation; development; exploitationとは、日本語表現では随分と類似（字面といい、耳からくる語感といい）しているようにおもえるけれど、おのおの中身ということになると、それこそ《文明》と《野蛮》との隔りほどの相違がある。後者すなわち『開拓』（現代では『開発』というふうに言い換えているが）のほうがつねに国家権力や巨大企業を離れては存在し得ないのに対して、前者すなわち『開明』のほうは個人の精神に深く関わってのみ存在する<sup>(32)</sup>。

以上の内容中、第1の荒浜時代、第2の小樽時代のくだりは『若き牧口常三郎（上）』の要点であり、第3の札幌時代（師範学校時代）については続編のうち既発表分の要点である。ところで齋藤は、『若き牧口常三郎（上）』の巻末で“下巻”の内容を次のように予告していた。

### 第三章 北海道尋常師範学校の内と外

I 北海道尋常師範学校へ入学／II 森有礼の遺産—師範学校生活の<sup>ネガティブ</sup>negativeな側面（その一）／  
III 森有礼の遺産—師範学校生活のnegativeな側面（その二）／IV 「幸福」という概念の発見—  
『如氏教育学』との出会い／V 「開拓精神」と「開明思想」とのはざままで／VI “地理学的思考”の  
発見＝再創造／VII 同時代青年の理想主義に呼応して

### 第四章 考える人—辺境から世界をみる青年の像

I 北海道尋常師範学校教諭兼訓導として／II ペスタロッチ主義教育かヘルバルト主義教育か—  
『改正教授術』の著者白井との邂逅—／III 科学的帰納法—北海道の現実に対する観察／IV ふたり

<sup>(28)</sup> 池田『牧口常三郎』31-34頁。熊谷『牧口常三郎』29-30頁。美坂『牧口常三郎』28-30頁。

<sup>(29)</sup> 齋藤正二『齋藤正二著作選集7——教育史・教育思想の研究』八坂書房、2004年、419頁。

<sup>(30)</sup> 齋藤『齋藤正二著作選集7』、509頁。

<sup>(31)</sup> 齋藤『齋藤正二著作選集7』、526-570頁。

<sup>(32)</sup> 齋藤正二『齋藤正二著作選集4』、390頁。

の地理学者——志賀重昂および内村鑑三／V “地理学的思考”の深まり——辺境からの発想／VI 反権力の思考——石狩事件で生徒がわに立つ唯一の教師

### 第五章 『人生地理学』の構想

I 挫折体験より咲きいずる“青春の書”／II 非戦論および社会主義運動への接近／III 社会学および生物進化論を足場にして／IV 「関係」という考えかた——人類、郷土、世界そして価値／V 『人生地理学』の構想（その一）／VI 『人生地理学』の構想（その二）／VII 『人生地理学』の構想（その三）／VIII 評価——地理学発達史における牧口常三郎の位置

凝鈍なくせに涉獵癖キョリアシテイの人一倍旺盛なわたくしの性向をおもうと、これだけの分量のものが首尾よく下巻六百数十ページのなかに盛り切れるかどうか心許こころもとないが、このうちの幾つかのセクション節はすでに書き終えて印刷所のゲラ版に収められていることではあり、こんどこそ、迷惑をかけないように心掛け、一日も早く完稿しなければならぬと、そう自分を戒めたり励ましにかかったりしている。

もともとわたくしの構想では、「若き牧口常三郎」の作品名のもとに把握せんとする不滅の地理学者＝教育思想家の“青春像”とは、幼少年時代よりはじまって『教授の統合フーニフ 郷土科研究』を公刊した一九一二年（大正元年）牧口四十一歳までに至る、なまなましい現実存在が嘗め味わった身体的時間および意識的時間に追い縋っていつて“外がわからの接近”を試み、この現実存在が荒々しい社会との持続的格闘のもとに“内的な発展”die innerliche Entwicklungを実現させた歴史的時間をば、いかにかけて掴みとらんがために、眼前に聳えさせた（また、じじつ聳え立つところの）像ビントであった。この“青春像”は、しかし、あまりにも巨大であり過ぎて、当方の探究能力の範囲（＝限度）を以てしては到底ちかづき得ないことが明白になってきた。こちらの能力不足がはっきりした今、当初の構想を頓挫させることもまた已むを得ないと観念した。『人生地理学』公刊前後までの時期にひと区切りを劃し、上下二巻を以て『若き牧口常三郎』の完結を期するよう変更した所以である。もし、さいわいにして、わたくしに相応さうおうの実力ないし地力ちりきがついたときには、大正デモクラシー期における牧口思想発展過程を研究対象にして『続・若き牧口常三郎』を完稿させ、本篇上下巻と併せて“三部作”を世に問うこともあり得なくはなからうと、そんな抱負たねあこに胸膨むねふくらませてみろが、なにしろ相手は超特大の人物であるがゆえ、率直に打ち明けると、逡巡の気持もないではない<sup>(33)</sup>。

続編の既発表分は、斎藤の予告のうち、「第三章」のI～IV（ないしV）節にほぼ該当すると見てよい。これ以降の未完部分の補填は、斎藤が『人生地理学』に付した注釈（全34章の脚注、第1章～第19章の補注）を手がかりにしつつ、今後の牧口研究者が引き受けるべき課題である。

### 3 思想史的研究

注釈的研究、評伝的研究につづけて斎藤が手がけたのが《思想史的研究》である。先の二種の研究が、もっぱら初期の傑作『人生地理学』の解説を作業の核に据えているのに対して、思想史的研究は、むしろ後期の傑作『創価教育学体系』、なかんずくその第1巻《教育学組織論／教育目的論》、第2巻《価値論》の解説に照準を定めている。単行本としては、『斎藤正二著作選集 第4巻——日本の自然観の研究IV』（八坂書房、2006年）に収録されている「二育（paradigm）と三育（Ideologie）との間」という、原稿用紙換算で500枚分の論考と、斎藤が逝去する直前に完成した『牧口常三郎の思想』（第三文明社、2010年）という、全700頁超、原稿用紙換算で1800枚近い大著がある（ほかにも単行本未収録の論文が幾つかある。本稿巻末「資料II」を参照のこと）。

<sup>(33)</sup> 斎藤『若き牧口常三郎（上）』、701-702頁。

これらは牧口著作の知的源泉や成立過程を詳細に跡づけ、近代日本の、さらには近代世界の哲学史・教育思想史の文脈に位置づけ直した労作であり、まさしく前人未到の業績と云ってよい。少なくとも牧口の“思想”を扱おうとする論者は、好むと好まざるとに拘らず、今後一度はこの研究を通ることを義務づけられることは間違いあるまい。

このうち、「二育 (paradigm) と三育 (Ideologie) との間」については、以前『斎藤正二著作選集 第4巻』の書評で扱ったので詳述しないが、近代日本思想史研究としても重要な論点を提起しているので最小限触れておく。同論考は、いわゆる《三育》——教育は「知育・徳育・体育」の三部門から成る——という思想が俗説でしかなく、そもそもこの三分法の創始者とされるスペンサー自身が《二育》——教育は「知育・体育」の二部門から成る——という思想の持ち主であったことを論証したものである。そこで斎藤は、スペンサー翻訳史を克明に跡づけ、上記のような誤解=歪曲が、明治10年代後半に文部省が自由民権運動を抑圧するプロセスで生じたものであることを論じ、『二育』という科学思考は《paradigm》<sup>(パラダイム)</sup>として学問研究の基礎的枠組をなすが、いっぽう、『三育』という政治思考のほうは《Ideologie》<sup>(イデオロギー)</sup>として信念体系形成のための説得手段の役割をのみもつばら演ずるものである<sup>(34)</sup>と結論する。これだけでも誠に興味深い論なのだが、とりわけ牧口研究の点で注目すべきは、近代日本でスペンサーの《二育》論を正確に理解した数少ない思想家の一人に、斎藤が牧口を挙げていることである（斎藤によれば、同様の見識を有して《二育》論を主張し得た知識人は、他には西田幾多郎と木村素衛くらいしかいないと言う<sup>(35)</sup>）。周知の通り、牧口は『創価教育学体系』第1巻で、日本人はよく「知育に急なるがため徳育不振に陥った」とか、「知育許りに骨折って、徳育は一向に顧みない」などと主張するがそれは誤解であり、実際は正しい知育がなされなかったから真の意味で徳育もなされなかったに過ぎない、そもそも知育と切り離された徳育など存在しないのだ、と述べている<sup>(36)</sup>。斎藤の論考は、この主張の学問的妥当性を思想史的に検証したものと云ってよい。

さて、斎藤が晩年に断続的に発表した、30本近い創価教育学関係の論文・論考をまとめたのが、2010年に『創価教育学体系』発刊80周年を記念して刊行された『牧口常三郎の思想』である。同書の基本的な立場=志向性について、斎藤は序文でこう述べている。

しからば、牧口常三郎は、いかにしてこの“科学的思考”を身に習得したのか。ここでも、牧口個人の資稟や性向を強調することは必ずしも誤ってはいないだろう。だが、わたくしは、一八九一年、“若き牧口常三郎”が蛇腹の制服を着用して受講した、北海道尋常師範学校における教育学の授業で、ジョホノットとリンドネルの教育理論（教科書として有賀長雄訳『如氏教育学』（一八八六年刊）と同『麟氏教授学』（一八九一年刊）が使用された。両書はペスタロッチとヘルバルトを思想的淵源としている）にしたたかに感激した学習体験こそ、後年の“科学的思考の胚をなしたものだ、とする見解をとる。同じ胚から、まず『人生地理学』が成体となり、『教授の統合中心としての郷土科研究』『地理教授の方法及内容の研究』

<sup>(34)</sup> 斎藤『斎藤正二著作選集4』、447頁。

<sup>(35)</sup> この件は斎藤『牧口常三郎の思想』、572-627頁に詳述してある。

<sup>(36)</sup> 『牧口常三郎全集 第5巻』第三文明社、1982年、97-98頁。

として成長し、寿命いっぱい『創価教育学体系』第一巻から第四巻までが“生きもの”として活動するのである。牧口は、生地柏崎県刈羽郡荒浜村（現・新潟県柏崎市荒浜）の回漕業者たちの“海洋的思考”をとおして、また移住先の北海道小樽区のひとつの“開明的思考”をとおして、すでにlogosに対する畏敬を知っていたから（拙著『若き牧口常三郎』（一九八一年刊）をご参看ありたい）、『如氏教育学』『麟氏教育学』との出会いにはいちいち合点するところがあつたに違いない。『創価教育学体系』のローガンとする「経験より出発せよ。／価値を目標とせよ。／経済を原理とせよ。／学習力に於て、教授力に於て、時間に於て、費用に於て、言語に於て、音声に於て、常に経済原理を旨とし、文化価値を目標として進め。／天上を仰いで歩むよりは、地上を踏み占めて、一步一步に進め」（『牧口常三郎全集 第五巻』、二七頁）は、全生涯に<sup>まが</sup>跨る牧口の教育学研究の積み重ねりから必然的に生まれた<sup>のう</sup>帰納法則である。この帰納法則にこそ、日本民衆の“生の重み”がかかっている。

その点からいって、わが牧口常三郎が歩みつづけた精神的軌跡は、もしも日本の教育が『教育勅語』（一八九〇年発布）によって極端に反理性的な方向へと一方交通の規制を受けなかったとしたならば、あるいは踏みあゆんだかもしれない<sup>わが</sup>轍の跡を、謂わば陰画原板の状態で暗示してはいないか。少なくとも『学事奨励に関する被仰出書』『学制』（ともに一八七二年頒布）から『帝国大学令』『小学校令』『中学校令』『師範学校令』（ともに一八八六年公布）に至る時期までの日本の教育は、じわじわと絶対主義的専制支配の枠組のなかに閉じ込められていく過程をとりながらも、一方では、意外と思えるほどの開明的主張が支持されていたのである。明治の人間がとりわけて偉大な才賦や能力を持っていたように言い難いのは、もともと作爲的意図から出た<sup>はな</sup>誣説であり、それ自身が幻想でしかないが、しかし、かれらがひとしなみに開明的思考に<sup>まが</sup>浸り得た一時期を経験した幸運により偉大な事業に立ち向かっていく（精神の自由）に目醒め得ていたことのみは否定すべくもない。かれらのうち、ひと足さきに登ったお山の大将により、あとから来る者を突き落とすための手段として考案されたのが、まさしく思想上の暴力装置たる教育勅語であった。牧口は、この明治精神形成過程にみずから立ち会いみずから苦悶していたから、<sup>はな</sup>夙く一九〇三年に大著『人生地理学』を公刊して（開明人に対する自然の意味）を明らかにし、大正期に入った一九一一年に『<sup>はな</sup>教授の統合中心としての郷土科研究』、一九一六年に『地理教授の方法及内容の研究』を刊行して（地理教授をとおしての科学的思考）の必要を説かずにはいられなかった。不正な論理を嫌い、インチキな道徳規範を憎んで、ついに第二次大戦下に獄死を強いられた牧口常三郎の生涯は、ロゴスの力を証し照らし、人類理性の頂点に位置する。

それゆえにこそ、牧口教育学は、現在も新しく、未来にわたっても新しい。『創価教育学体系』が正当に読まれることを冀<sup>まが</sup>ってやまぬ所以である。本書はそのための補助の一試みにすぎないのであり、要は“自分の頭で考え”ながら原典に迫り、牧口思想世界との“格闘”を各人で引き受けて頂きたい、というに尽きる。牧口先生は今も生き、われらの知的挑戦を待っておられる<sup>(37)</sup>。

『牧口常三郎の思想』が従来の牧口解釈を刷新した点は、これまた大小合わせて数十箇所の上ると思われるが、紙幅の都合でここでも3点に絞らざるを得ない。

同書第1部「創価教育学の基礎理念」で斎藤が徹底して論じているのは、「価値創造」という術語が牧口の造語ではないこと、換言すれば、この術語は明治終盤以降、大正デモクラシー思潮に乗って日本の教養知識人たちが頻繁に使用していた社会運動のキーワードであったということである<sup>(38)</sup>。この事実を踏まえると、昭和ファシズム期にも「価値創造」の理念を掲げ続けた牧口が特高警察から弾圧されざるを得なかった理由も理解できる、と斎藤は言う<sup>(39)</sup>。その傍証とし

(37) 斎藤正二『牧口常三郎の思想』第三文明社、2010年、2-4頁。

(38) 斎藤『牧口常三郎の思想』、19-23頁。

(39) 斎藤『牧口常三郎の思想』、24-35頁。

て齋藤は、1937年に文部省が国民教化小冊子『国体の本義』のなかで「価値創造」という言葉を弾劾していること（当局見解としては、「万古不易の国体」という伝統的価値を実現することが重要で、新しく価値を創造するというのはおよそ西洋流の個人主義＝民主主義にかぶれた愚かな思想と捉えていた）を挙げている<sup>(40)</sup>。通常なら、『創価教育学体系』の「創価」という言葉それ自体に牧口の思想性を見るところを<sup>(41)</sup>、齋藤は、むしろ牧口がその言葉が内包する理念を（国家権力に抵抗してまで）貫徹したところにこそ真の思想性を見ている。齋藤の概念史的研究手法が遺憾なく発揮された箇所と言ってよいであろう。

つづいて、第2部「創価教育学の知的源泉」において齋藤は、牧口がカントおよびその系列の哲学を近代日本で正統に継承した思想家であったことを、徹底的に資料で跡づけている。通説では、牧口の《価値論》はカントの「真・善・美」を否定して「利・善・美」に置き換えたものとして解釈されてきたが<sup>(42)</sup>、これに対して齋藤は、牧口が《真理の認識》と《価値の創造》との両者を等しく重視している点を重視し、本来は、真理のカテゴリーたる「真・善・美」の認識を踏まえうえて価値のカテゴリーたる「利・善・美」の創造を目指すところに牧口の真意があると主張した<sup>(43)</sup>。また、齋藤は、こうした《真理の認識》と《価値の創造》との二元論を、牧口がカント哲学および新カント派哲学を忠実に学習した成果であると指摘し、その学習がじつは彼が北海道尋常師範学校時代にヘルバルト教育学の《多方興味》の理論（ヘルバルトは19世紀最大のカント主義者の一人である）を起点にしていたことを論証している<sup>(44)</sup>。さらに、ヘルバルトの多方興味説に、同じく牧口が師範学校時代に習熟したキルヒネルの教育学思想や<sup>(45)</sup>、大正時代に入って出会ったデュルケムの社会学思想（これらの思想もすべてカント哲学からの影響、および新カント派哲学との関係のなかで誕生したものである）<sup>(46)</sup>が接ぎ木されることで、最終的に『創価教育学体系』の価値論が樹立されたという成立史のプロセスを、齋藤は、19世紀末ドイツの社会科学史や教育政策史をも渉猟しつつ綿密に再構成している。以上は単に牧口解釈を刷新するのみならず、ドイツでも半ば忘却されていた教育学者キルヒネルに光を当て、またフランスでも日本でももっぱら社会学者として著名なデュルケムを教育学の側面から再評価しようとした点で、西洋近代思想史研究としても非常にユニークな仕事になっている。

最後に、第3部「牧口常三郎研究ノート」で齋藤は、再度カントの二元論、とくに《真理の認識vs. 価値の創造》という枠組に基づき、牧口思想を継承して未来に活かし続けるための視座を提示している。すなわち、齋藤は『創価教育学体系』全巻を子細に調査した結果、「創価教育学」と

<sup>(40)</sup> 齋藤『牧口常三郎の思想』、32-35頁、643-644頁。

<sup>(41)</sup> 美坂『牧口常三郎』、102頁。

<sup>(42)</sup> 美坂『牧口常三郎』、295-301頁。

<sup>(43)</sup> 齋藤『牧口常三郎の思想』、（第1部の14-19頁と連動して、第2部の）149-153頁。

<sup>(44)</sup> 齋藤『牧口常三郎の思想』、（第1部の45-47頁と連動して、第2部の）124-168頁。

<sup>(45)</sup> 齋藤『牧口常三郎の思想』、251-268頁、および第2部第4～5章の全体。

<sup>(46)</sup> 齋藤『牧口常三郎の思想』、237-250頁、および第2部第6～7章の全体。

いう術語は頻出するが「創価教育」という術語はわずかしか使用されておらず、しかもそのわずかな例ですらも良く読むと「創価教育学」の言い換えにすぎないという事実を指摘する<sup>(47)</sup>。要するに、『創価教育学体系』のなかには、厳密に言うところ「創価教育」という術語は存しないということである。この一見奇妙な事実を斎藤はこう解釈する。「牧口先生はこう考えておられたのではないか。“私は自分なりに『創価教育学』という理論を打ち立てた、あとは後輩たちが責任をもって『創価教育』を創り出してほしい”、と。つまり、『創造』とは、無いところから生み出していくものである。先輩の言うことや本に書いてあることを暗記するだけでは、『価値消費』にすぎない。『価値消費』と『価値創造』とは違うのである。わたしたちひとりびとりが真剣に学び考えて、迷ったり躓いたりしたときには、『牧口先生ならどうお考えになるだろうか』と自問自答して、『創価教育』を文字通り『創造』していく必要があると言えよう<sup>(48)</sup>。——話が前後するが、第2部「創価教育学の知的源泉」最終章では、この《創価教育学vs. 創価教育》という問題について、斎藤が我々読者に対する“宿題”を与えているくだりがある。

事実問題として、牧口は「創価教育学」の術語使用に関して殆ど数百回繰り返しているが、一方、「創価教育」のターミノロジーとなると、それこそ滅多に使用したことがなかった。なんでもないことのようにだが、この客観的事実に気付いた人すら嘗て皆無だったとは、考えてみれば迂闊に過ぎる。本稿筆者の調査結果として、『創価教育学体系』全四巻約千頁のなかで、牧口自身が「創価教育」の学問術語を使用した事例は僅かに六例しか無かった事実に突き当たった最初の時には、あまりの衝撃に暫し茫然とせざるを得なかったくらいである。そして、その理由について、ああでもないこうでもないと考えあぐねて荏苒数年を無為に過ごしてしまったが、今や、漸く解答＝解釈が見えはじめてきた。これに関する論述となると、本稿筆者の老いぼれ頭にも忽ち数十枚の原稿が出来上がってきそうな気もするが、茲では、「創価教育学」とはあくまで「真理の認識」であり「経験」（ヘルバルト主義教授学で謂う意義での）であり「知的作用」であり「依法」であり、「公共的普遍的」であるところの範疇order ; Kategorieに所属しており、いっぽう「創価教育」とは原則的に「価値の創造」であり「交際」（ヘルバルト主義教授学で使われる意味での）であり「情意の作用」であり「依人」であり「個別的特殊的」であるところの範疇に帰属せしめられるべき性質を有する、という概略的彙類を呈示するにとどめたい。むしろ、読者各位に対して、当方から宿題＝設問を提出させて頂きたい。（この問いに対する答えは、読者各位が一生かかって自ら作成して下さるよう念願するほかないが）。

【設問】下の「新教育学建設スローガン」(A)と「創価教育六大指標」(B)とを比較熟考し、各自ひとりびとりの「真理認識」「価値創造」の次元で何を為すべきかの課題について答えなさい。

A 『創価教育学体系・第一巻』第一編 教育学組織論／第二章 教育学の価値的考察、第二節（全集第五巻、二七頁）……因つて余は世の教育学者に否、全教育家に向つて、新教育学建設のスローガンを提唱したい。

経験より出発せよ。／価値を目標とせよ。／経済を原理とせよ。

学習力に於て、教授力に於て、時間に於て、費用に於て、言語に於て、音声に於て、常に経済原理を旨とし、文化価値を目標として進め。

天上を仰いで歩むよりは、地上を踏み占めて、一步一步に進め。

B 『創価教育学体系・第三巻』第四編教育学改造論／扉裏全ページ（全集第六巻、一二頁）

(47) 斎藤『牧口常三郎の思想』、628-634頁、650-651頁、679頁。

(48) 斎藤『牧口常三郎の思想』、650-651頁。

自然の個性	一	感情の理性化	文化の人格
	二	自然の価値化	
	三	個人の社会化	
	四	依人の依法化	
	五	他律の自律化	
	六	放縦の統一化	

[…]「創価教育学の三大スローガン」と「創価教育の六大指標」とを厳密に峻別したうえ、特に年若き研究者たち信仰者たちが“いま自分が関わりを持っているのは創価教育学なのか創価教育なのか”と自問自答しつつ、基本的につねに「真理の認識」「価値の創造」の二元論的命題の解明＝解決をうじて「幸福生活の実現」を成し遂げて頂きたいと念願して已まない<sup>(49)</sup>。

これは、斎藤があえて“解答”を書き残さなかった論題であり、読者おのおのが自らの知性と経験とをもって格闘していくべき課題と言わねばならない。

付言すると、第3部「牧口常三郎研究ノート」最終章は「牧口平和思想の背景にあるもの」と題し、旧著『若き牧口常三郎（上）』を補完する（ただし、青年期を扱う“続編”ではなく、生誕前後の時期に遡る“補論”としての）論考を取めている。すなわち、牧口の生地である柏崎は、維新期の戊辰戦争において幕府側に組みしたために藩閥政府側からの徹底的攻撃を被った場所であり、そうした政治的負け組の土地に生まれた牧口だからこそ、後年にも日本政府の推し進める教育政策に対していわば身体次元で反発を覚えざるを得なかった、と斎藤は言う<sup>(50)</sup>。この“身体的＝場所的記憶”を、斎藤は牧口中期の著作『地理教授の方法及内容の研究』（1916年）から読み取ろうとしており、興味深いテキスト読解を展開している。

（ちなみに、斎藤は自身の著作選集全7巻が完結した2006年以降、柏崎と牧口常三郎という論題で新たな小著を書き下ろす構想も抱いていた。同構想を直接聞いた者として、ここに付記する義務を覚えた次第である。）

## おわりに

以上、斎藤正二の牧口常三郎研究のなかから、今後も末永く牧口読者や牧口研究者に益するであろう視点を筆者なりに十個ほど選んで、その要点と意義を述べてみた。もちろん、本稿が見落としている重要な問題提起もたくさんあると思う。御批正を乞いたい。限られた紙幅で纏めるのはもとより筆者の力量に余ることであり、彼の思想史研究の方法等については機会を改めて論じるつもりである。また、筆者が1999年春から2006年春にかけての8年間、斎藤の牧口ゼミナールに出席していたときのノートが15冊分あるので、ゆくゆくはそれも紹介する機会があればと考えている。ともあれ、斎藤ほどに牧口の人物と思想に心底惚れ込み、その歴史的・学術的意義の解明に全精力を注ぎ抜いた学者は稀である。斎藤は生前しばしば、牧口という稀有の研究対象

<sup>(49)</sup> 斎藤『牧口常三郎の思想』、514-516頁。

<sup>(50)</sup> 斎藤『牧口常三郎の思想』、687-696頁。

との出会いを僥倖と語っていたが、牧口研究にとっても、斎藤という稀有の碩学を得たことはまさに僥倖以外の何物でもなかったと言わねばならない。

最後に、斎藤が半世紀にわたって築き上げた、空前絶後とも言うべき牧口研究の金字塔の陰には、病身の斎藤を長年にわたり献身的に支え続けた節子夫人の功績が誠に絶大であったことを付記して、拙文を結ばせて頂く次第である。

(斎藤正二先生の一周忌に記す)

## 資料Ⅰ 主要著作一覧 (※は牧口研究関係)

### —著作— (主要単著のみ記す)

『松尾芭蕉——自然を愛した詩人』(岩崎書店、1959年)

『書物と印刷の文化史』(国土社、1960年)

『戦後の短歌』(社会思想社、1966年)

『「やまとだまし」の文化史』(講談社、1972年)

『日本人と植物・動物』(雪華社、1975年)

『花の思想史』(ぎょうせい、1977年)

※『日本の自然観の研究』(全2巻、八坂書房、1978年)

下巻に牧口研究論文1本を収録(詳細は「資料Ⅱ」のNo. 3を参照のこと)

『日本人とサクラ』(講談社、1980年)

※『若き牧口常三郎』(第三文明社、1981年)

『世界子どもの歴史Ⅰ・先史時代』(第一法規、1985年)

※『日本の自然観の変化過程』(東京電機大学出版局、1985年)

牧口研究論文2本を収録(詳細は「資料Ⅱ」のNo. 10、14を参照のこと)

『古事記の物語』(八坂書房、1989年)

『斎藤正二著作選集』(全7巻、八坂書房、2001-06年)

※ 第2巻「日本の自然観の研究Ⅱ」(2002年) 前掲『日本の自然観の研究』下巻の再録

※ 第4巻「日本の自然観の研究Ⅳ」(2006年) 前掲『日本の自然観の変化過程』の再録、および牧口研究関係論文4本を収録(詳細は「資料Ⅱ」のNo. 25、27、29、30を参照のこと)

※ 第7巻「教育史・教育思想の研究」(2004年) 牧口研究論文2本を収録(詳細は「資料Ⅱ」のNo. 22、31を参照のこと)

※『牧口常三郎の思想』(第三文明社、2010年)

『若き牧口常三郎』以降の論考を収録(詳細は「資料Ⅱ」のNo. 20、21、32~34、36、37、39~57を参照のこと)

### —編集— (主要なもののみ記す)

『現代詩人全集』(創元社、1953-1955年)

『新釈漢和』(共編、明治書院、1969年)

『日本を知る事典』(共編、日本思想社、1971年)

※『牧口常三郎全集』(共編、全10巻、第三文明社、1981-1996年)

第1巻「人生地理学 上」(1983年) 校訂・脚注・補注をすべて担当



- 第2巻「人生地理学 下」(1996年) 校訂・脚注・補注をすべて担当  
 第8巻「創価教育法の科学的超宗教的実験証明、創価教育学大系概論、後期教育学論集Ⅰ」(1984年) 教育学関係論文の校訂・脚注・補注を担当  
 第9巻「後期教育学論集Ⅱ」(1988年) 教育学関係論文の校訂・脚注・補注を担当  
 『世界子どもの歴史』(共編、全11巻、第一法規出版、1984-1985年)  
 ※『映像評伝 学問と情熱33 牧口常三郎—こどもたちのしあわせのために』  
 (監修、紀伊国屋書店、2005年) 本編と特典映像にインタビューを収録

—翻訳— (主要なもののみ記す)

- アポリネール『キュビズムの画家たち』(緑地社、1957年)  
 カンディンスキー『現代芸術の精神』(昭森社、1958年)  
 ロジャーズ『大学教育の理念』(緑地社、1958年)  
 ミショー『文学とは何か』(平凡社、1961年)  
 トウェイン『ハックルベリ・フィンの冒険』(2巻、角川書店、1962年)  
 アラン『芸術に関する一〇一章』(平凡社、1962年)  
 ブドゥアン『仮面の民俗学』(白水社、1963年)  
 スウィフト『ガリヴァー旅行記』(角川書店、1964年)  
 トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』(角川書店、1964年)  
 バイロン『バイロン詩集』(角川書店、1967年)  
 ランボー『ランボー全集』(共訳、雪華社、1970年)  
 フランクリン『フランクリン自伝』(講談社、1973年)  
 ディケンズ『二都物語』(学研、1975年)  
 ハーン『怪談』(講談社、1976年)  
 エリアーデ『ザルモクシスからジンギスカンへ』(2巻、せりか書房、1976-1977年)  
 モース『日本人の住まい』(共訳、八坂書房、1979年)  
 ハーン『ラフカディオ・ハーン著作集』第5、14、15巻(共訳、恒文社、1983-1988年)

資料Ⅱ 牧口研究論文・論考一覧 (初出以外の収録は備考に記す)

No.	タイトル	発表媒体	掲載頁	出版社・発行所	発表時期	備考
1	牧口常三郎初期思想と『人生地理学』	『復刻・人生地理学 解题』	80-83頁	第三文明社	1975年11月	
2	万人のための教育思想家	聖教新聞	7面	聖教新聞社	1976年6月6日	
3	若き牧口常三郎—“海洋的思考”の形成	第三文明	6-15頁	第三文明社	1976年11月	『日本の自然観の研究(下)』476-489頁に収録。 『斎藤正二著作選集2 日本の自然観の研究Ⅱ』474-487頁に再録
4	牧口「教育論」の射程	第三文明	26-27頁	第三文明社	1977年6月	
5	「人生地理学」の教育思想—民衆愛貫きファシズムを批判	聖教新聞	8面	聖教新聞社	1977年11月18日	『創価学会ニュース』第85号(1977年12月)21-24頁に収録
6	若き牧口常三郎と北海道—「開明思想」対「開拓精神」	第三文明	36-49頁	第三文明社	1978年10月	
7	てい談 牧口常三郎と現代	第三文明	20-35頁	第三文明社	1978年11月	国松久弥・熊谷一乗との鼎談
8	牧口常三郎『人生地理学』のロゴス	図書新聞	7面	図書新聞	1979年10月20日	

9	牧口常三郎の“科学的思考”	『復刻・創価教育学体系 別巻』	79-86 頁	第三文明社	1979 年 11 月	
10	牧口常三郎の思想像——ラディカリズムに支えられた野党精神	第三文明	84-93 頁	第三文明社	1981 年 3 月 1 日	『日本の自然観の変化過程』757-772 頁に収録。『斎藤正二著作選集 4 日本の自然観の研究 IV』358-373 頁に収録
11	座談会 牧口常三郎の思想像・人間像(1)	『牧口常三郎全集第三巻』月報	7-11 頁	第三文明社	1981 年 11 月	佐藤秀夫・中川浩一との座談会
12	座談会 牧口常三郎の思想像・人間像(2)	『牧口常三郎全集第四巻』月報	6-8 頁	第三文明社	1981 年 12 月	佐藤秀夫・中川浩一との座談会
13	わが著書『若き牧口常三郎(上)』	大白蓮華	97 頁	聖教新聞社	1982 年 1 月	
14	若き牧口常三郎と現代——『人生地理学』研究の最前線から	第三文明	46-55 頁	第三文明社	1982 年 12 月	『日本の自然観の変化過程』773-791 頁に収録。『斎藤正二著作選集 4 日本の自然観の研究 IV』374-395 頁に収録
15	『人生地理学(上)』校訂・脚注おぼえ書き	『牧口常三郎全集第一巻 人生地理学(上)』	603-606 頁	第三文明社	1983 年 1 月	
16	天照大神信仰を拒絶して獄死した思想家——『牧口常三郎全集』私記	図書新聞	4 面	図書新聞	1983 年 5 月 7 日	
17	現代に生きる卓抜した先見性と信念——人間愛あふれる「青春の書」『人生地理学』	聖教グラフ	20-21 頁	聖教新聞社	1983 年 6 月	
18	『人生地理学』から『創価教育学大系』へ——『牧口常三郎全集』註釈私記	第三文明	60-65 頁	第三文明社	1983 年 7 月	
19	『実験証明』と『大系概論』——『牧口常三郎全集』(第八巻)の刊行にふれて	第三文明	58-66 頁	第三文明社	1984 年 11 月	
20	解題——『創価教育法の科学的超宗教的実験証明』『創価教育学大系概論』『後期教育学論集 I』	『牧口常三郎全集第八巻 後期教育学論集 I』	473-505 頁	第三文明社	1984 年 11 月	『牧口常三郎の思想』80-107 頁に収録
21	《牧口全著作コレクション》顧末記——他人迷惑を顧みぬ執着と、不思議な幸運と	『牧口常三郎全集第九巻』月報	7-11 頁	第三文明社	1988 年 3 月	『牧口常三郎の思想』721-726 頁に収録
22	若き牧口常三郎《評伝的研究 1》——北海道尋常師範学校に無試験入学する	教育学部論集 第 26 号	45-131 頁	創価大学教育学会	1989 年 3 月	『斎藤正二著作選集 7 教育史・教育思想の研究』411-503 頁に収録
23	牧口教育理論と平和思想	創価大学平和学会会報 No. 10/11	15-24 頁	創価大学平和学会	1989 年 11 月	
24	「二育並立論」から再出せよ	創価教育 第 12 号	2-5 頁	創価大学創価教育学研究会	1990 年 11 月	
25	「二育 paradigm」と「三育 Ideologie」との間——牧口教育理論の基本思考を検証する作業の試み《第 1 回》	教育学部論集 第 29 号	201-250 頁	創価大学教育学会	1990 年 12 月	『斎藤正二著作選集 4 日本の自然観の研究 IV』447-498 頁に収録
26	座談会「創価教育学を語る」——牧口常三郎『創価教育学体系』刊行 60 周年記念	創大教育研究 創刊号	5-45 頁	創価大学教育学会	1991 年 3 月	佐藤秀夫・熊谷一乗との座談会
27	「二育 paradigm」と「三育 Ideologie」との間——牧口教育理論の基本思考を検証する作業の試み《第 2 回》	教育学部論集 第 31 号	45-77 頁	創価大学教育学会	1991 年 12 月	『斎藤正二著作選集 4 日本の自然観の研究 IV』499-533 頁に収録

斎藤正二の牧口常三郎研究

28	牧口常三郎『人生地理学』第十八章太気・補注	創大教育研究 第2号	105-130頁	創価大学教育学会	1992年2月	『牧口常三郎全集 第二卷 人生地理学(下)』 472-482頁に収録
29	「二育 paradigm」と「三育 Ideologie」との間——牧口教育理論の基本思考を検証する作業の試み《第3回》	教育学部論集 第32号	1-36頁	創価大学教育学会	1992年3月	『斎藤正二著作選集4 日本的自然観の研究IV』 534-571頁に収録
30	「二育 paradigm」と「三育 Ideologie」との間——牧口教育理論の基本思考を検証する作業の試み《第4回》	教育学部論集 第33号	63-96頁	創価大学教育学会	1992年12月	『斎藤正二著作選集4 日本的自然観の研究IV』 572-609頁に収録
31	若き牧口常三郎《評伝的研究・2》——『如氏教育学』との出会い、「知」「経済」「幸福」概念の発見	創大教育研究 第3号	67-166頁	創価大学教育学会	1993年1月	『斎藤正二著作選集7 教育史・教育思想の研究』 504-596頁に収録
32	「二育 paradigm」と「三育 Ideologie」との間——牧口教育理論の基本思考を検証する作業の試み《第5回》	教育学部論集 第34号	153-195頁	創価大学教育学会	1993年3月	『牧口常三郎の思想』 597-627頁に収録
33	ヘルバルト《实在論から牧口《価値論》へ(上) ——価値創造の「結構」をなすヘルバルト「教育学の理法」を炙り出す——	教育学部論集 第36号	1-26頁	創価大学教育学部	1994年3月	『牧口常三郎の思想』 115-181頁に収録
34	ヘルバルト《实在論から牧口《価値論》へ(中) ——価値創造の「結構」をなすヘルバルト「教育学の理法」を炙り出す——	教育学部論集 第37号	59-86頁	創価大学教育学部	1994年12月	『牧口常三郎の思想』 182-227頁に収録
35	熊谷一乗著『創価教育学入門』に学ぶ	第三文明	96-99頁	第三文明社	1995年3月	
36	『創価教育学体系第二巻・第三編価値論』序への補注	『創立25周年記念論文集』	668-680頁	創価大学出版会	1995年11月	『牧口常三郎の思想』 555-571頁に収録
37	『人生地理学』研究のための序論	『牧口常三郎全集 第二巻 人生地理学(下)』	519-543頁	第三文明社	1996年1月	『牧口常三郎の思想』 529-555頁に収録
38	『人生地理学(下)』編纂・校訂・注釈おぼえ書き	『牧口常三郎全集 第二巻 人生地理学(下)』	545-551頁	第三文明社	1996年1月	
39	ヘルバルト《实在論から牧口《価値論》へ(下a) ——価値創造の「結構」をなすヘルバルト「教育学の理法」を炙り出す——	教育学部論集 第40号	63-94頁	創価大学教育学部	1996年3月	『牧口常三郎の思想』 228-284頁に収録
40	創価思想の源流に学ぶ①——「価値創造」は人類普遍の科学的真理 牧口思想に見る普遍性・人類性・時代性	第三文明	54-57頁	第三文明社	1996年8月	『牧口常三郎の思想』 13-23頁に収録
41	創価思想の源流に学ぶ②——軍国支配下に迫害の対象となった『価値創造』の概念＝術語	第三文明	56-60頁	第三文明社	1996年9月	『牧口常三郎の思想』 24-35頁に収録
42	創価思想の源流に学ぶ③——「信の人」牧口は、自己の過誤を認めて修整する「知の人」であった	第三文明	56-61頁	第三文明社	1996年10月	『牧口常三郎の思想』 36-47頁に収録
43	創価思想の源流に学ぶ④——教育から“無駄な”時間・費用・労力を排する「学習の経済」を提唱	第三文明	60-66頁	第三文明社	1996年11月	『牧口常三郎の思想』 48-61頁に収録

44	創価思想の源流に学ぶ⑤— —智育「偏軽」の弊害を質して、「 真の智育」教育確立こそ 幸福実現(価値創造)への道	第三文明	58-64 頁	第三文明社	1996 年 12 月	『牧口常三郎の思想』 62-79 頁に収録
45	ヘルバルト《实在論から牧口 《価値論》へ(下b) — 価 値創造の「結構」をなすヘル バルト「教育学の理法」を炙り 出す—	教育学部論集 第 41 号	99-134 頁	創価大学教育学部	1996 年 12 月	『牧口常三郎の思想』 285-347 頁に収録
46	ヘルバルト《实在論から牧口 《価値論》へ(下c) — 価 値創造の「結構」をなすヘル バルト「教育学の理法」を炙り 出す—	教育学部論集 第 42 号	75-104 頁	創価大学教育学部	1997 年 3 月	『牧口常三郎の思想』 348-397 頁に収録
47	日本近代文教政策にみる光 と闇—教育は必ず過誤を 犯すものである	あうろーら 近 代の光と闇	75-93 頁	21 世紀の関西を 考える会	1997 年 4 月	『牧口常三郎の思想』 572-596 頁に収録
48	牧口常三郎が未来に託した 「創価教育」	第三文明	20-23 頁	第三文明社	1997 年 10 月	『牧口常三郎の思想』 628-634 頁に収録
49	ヘルバルト《实在論から牧口 《価値論》へ(下d) — 価 値創造の「結構」をなすヘル バルト「教育学の理法」を炙り 出す—	教育学部論集 第 43 号	1-38 頁	創価大学教育学部	1997 年 12 月	『牧口常三郎の思想』 398-463 頁に収録
50	ヘルバルト《实在論から牧口 《価値論》へ(下e) — 価 値創造の「結構」をなすヘル バルト「教育学の理法」を炙り 出す—	教育学部論集 第 44 号	55-90 頁	創価大学教育学部	1998 年 3 月	『牧口常三郎の思想』 464-526 頁に収録
51	随想 牧口常三郎研究は第 三段階に入った	学光	17-21 頁	創価大学通信教育 部	2001 年 6 月	『牧口常三郎の思想』 726-729 頁に収録
52	「教育のための社会」を実現 する「創価教育」	第三文明	72-75 頁	第三文明社	2001 年 7 月	『牧口常三郎の思想』 107-112 頁に収録
53	TALK21 牧口常三郎初代会 長の人生に学ぶ—今日も 新しい価値の創造を	聖教新聞	5 面	聖教新聞社	2004 年 3 月 14 日	信本俊一との対談。『牧 口常三郎の思想』 675-679 頁に収録
54	牧口常三郎の平和思想	創価大学学生 平和論集 第 3 集	56-97 頁	創価大学学生自治 会	2005 年 7 月	『牧口常三郎の思想』 680-720 頁に収録
55	牧口常三郎研究の第三段階 のために	創価教育 第 2 号	148-157 頁	創価大学創価教育 研究所	2009 年 3 月	『牧口常三郎の思想』 635-649 頁に収録
56	『創価教育学体系』研究序説 —「新教育学建設のスロー ガン」について	創価教育 第 3 号	142-152 頁	創価大学創価教育 研究所	2010 年 3 月	『牧口常三郎の思想』 650-669 頁に収録
57	最後の獄中書簡について —全集補注に対する修正案	『牧口常三郎の 思想』	669-674 頁	第三文明社	2010 年 8 月	執筆時期不明

また、国立情報学研究所・学術情報ナビゲータ (CiNii) には以下の発表要旨が収められている。

- ① 「牧口常三郎初期教育思想の研究(I)——『人生地理学』に“生活主体と地域との関係”をさぐる」、日本教育学会大会研究発表要項36、1977年9月
- ② 「教育学パラダイムの有効性——牧口常三郎の場合：『人生地理学』はジョホノット教育学・ヘルバルト主義教授理論から生まれた」、日本教育学会大会研究発表要項41、1982年8月
- ③ 『『赤い鳥』(鈴木三重吉) vs. 『おとぎの世界』(山村暮鳥)、そして「随意選題主義」(芦田恵之助) vs. 「文型応用主義」(牧口常三郎) ——大正自由教育の歴史的意義を風化させないための新規角」、日本教育学会大会研究発表要項44、1985年9月